

## 中学校教材としての漱石文学 － 現行教科書教材に着目して －

植西 浩一

Soseki literature as teaching material in junior high school  
－ Focusing on textbooks now in use －

Kouichi Uenishi

キーワード 教科書 夏目漱石 読書教材 近代日本文学 言文一致体 伝統的な言語文化 古典

### 1. はじめに

『月刊国語教育』（東京法令出版）は、1992年5月号で、「鷗外・漱石が危ない」と題する特集を組んでいる。すでに四半世紀以上前の時点で、このような認識がなされていたのである。

この特集の冒頭に掲げられた座談会に於いて、大平浩哉が、次のような発言をしている。

ところで、最近、国語の教科書が分かりやすさというところに目安を置きすぎて、軽薄短小の教材が増えているという指摘がありますね。また、漱石・鷗外のような近代日本の流れというものと、それらが現代に与える影響ということ考えた場合に、どうしても通過しなくてはいけないものが、教科書教材の方ではややもすれば減ってきていると、警鐘を鳴らしている人たちもいます。<sup>注1</sup>

大平の危惧した「軽薄短小の教材が増え」という傾向は、さらに進んでいると言わざるを得ない。また、パソコン、スマホ等の普及で若年層の読書離れも加速度的に進み、漱石・鷗外にふれることなく成人になる層も少なくはない。

この座談会で大平はさらに、明治維新によって「大きく近代的な変化を遂げた。その中で生きた様々な人間の精神的なもの、あるいは社会的な背景というものがきちんと描かれているものとしては、やはり漱石・鷗外の作品が群を抜いている」と述べる。その上で、「中学生には楽しく読める、おもしろかったと言えるところがなければいけない」とし、そのような作品は、『坊っちゃん』と『吾輩は猫である』くらいだと言う。さらに、『坊っちゃん』を評して「正義感があるスカッとしていて、自分と比べながら読める小説」とする。この『坊っちゃん』観に対しては、出席者の小泉浩一郎が、「しかし、この作品は実はとても暗い」と異議を唱え、「そこで、その暗さを果たして教えなくていいのか、やはり問題ですね。『坊っちゃん』を切り取る場合も、難しいですね」と言う。<sup>注2</sup>

『坊っちゃん』の教材化にまつわるこのような問題は、今なお検討を要する課題である。「読むこと」の教材としてどう扱うべきか、読書教材としてはどう提示すべきか、中学校の現行教科書に焦点を当てて、若干の考察を試みる。

### 2. 現行中学国語教科書の漱石文学

中学校の現行国語教科書には、5社すべてに『坊っちゃん』が採録されている。いずれも、掲載箇所は冒頭部分で、すべて「親譲りの無鉄砲で、子ども（子供）のとき（時）から損ばかりしている。」という人口に膾炙した書き出しに始まり、清との別れの場面の描写、「なんだか（何だか）たいへん（大変）小さく見えた」で終わっている。<sup>注3</sup>

また、掲載学年は、5社のうち、東京書籍、学校図書、教育出版、の3社が2年生、光村図書が1年生、三省堂が3年生である。また、三省堂の3年生教材は、読むことに位置付けられているが、2年生の東京書籍、学校図書、教育出版は読書教材として位置付けられている。1年生の光村図書のものは「資料」という扱いになっている。

このように、現在、漱石の作品は、中学校では『坊っちゃん』のみが扱われており、また1社を除いては「読書」

あるいは「資料」という位置付けであり、指導に充当されている時間も多くない。

教科書教材は、総じて掲載作品が限定され、定番化されていく傾向があるが、このように漱石文学も例外ではない。かつては、『吾輩は猫である』が多くの教科書に収録されていたし、『文鳥』、『夢十夜』、『二百十日』、『草枕』、『三四郎』、『硝子戸の中』、『永日小品』等、多様な作品が教科書教材となっていた。評論や手紙、日記等も中学校教材になっている。<sup>注4</sup> また、現在のように多くが、読書教材としての扱いではなく、読むことの教材として位置付けられていた。

### 3. 読書教材としての『坊っちゃん』

2年生の読書教材として採録された『坊っちゃん』は、次のような教材として仕立てられている。

東京書籍『新編新しい国語 2』には、「読書への招待」と題された読書単元が3単元設けられているが、『坊っちゃん』はその3番めで、教科書の末尾に置かれている。『坊っちゃん』の後は「基礎編」、「資料編」になっている。教科書教材を前から扱っていく場合は、春休みの読書を想定した位置にあると言えようか。ちなみに、最初の読書単元で取り上げられているのは、ラッセル・フリードマン「小さな労働者」（千葉茂樹訳）で、幼い子どもが苛酷な労働を強いられる現実を取り上げた文章である。本書の読書単元には、文章の後に課題と読書案内が示されているが、課題は「それぞれの写真やハインの仕事について、気づいたことや感想を話し合ってみよう」である。本文の後に付された「読書案内」は、「本で世界を広げよう＜人権＞」というタイトルが付されていて、「読み比べよう」と題された1ページには、『わたし8歳、カカオ畑で働き続けて。』他4編、次の「読み広げよう」では、1ページに『アンネの日記』他8編の紹介が掲載されている。人権に関わるノンフィクション作品の読書への誘いである。また、「読書案内」にも、「本を読み、その魅力について自分の考えをまとめる」という課題が付けられているが、これは「人権」に焦点をあてたものではない。

2番めの「読書への招待」に掲げられたのは、「歴史の物差し－水月湖の年縞－」（山根一眞）で、課題は、「水月湖の「年縞」について、分かったことや調べてみたいことを話し合ってみよう」となっている。続く「読書案内」も「本で世界を広げよう＜科学・歴史＞」であるように、科学や歴史に関する読書への誘いで、情報処理・活用も意識された単元である。これらに対し、『坊っちゃん』の収められた第3の単元は、読書案内が「日本の名作を読もう」と「本の世界を楽しもう」である。後の「本の世界を楽しもう」は、全読書単元の総括的な意味合いを有しているようで、日本の現代文学、海外文学、ノンフィクションと、選ばれている書物は多様である。これに対し、その前にある「日本の名作を読もう」は、日本の近現代文学の名作への誘いとなっている。ここで紹介されている書物は、『吾輩は猫である』、『夢十夜』（以上夏目漱石）、『銀の匙』（中勘助）、『友情』（武者小路実篤）、『小僧の神様』（志賀直哉）、『伊豆の踊子』（川端康成）、『キャラメル工場から』（佐田稲子）、『山椒魚』（井伏鱒二）である。特筆すべきは、『坊っちゃん』を含めると3作品が漱石文学であることだ。また、鷗外作品は採られていない。日本の近代文学への誘いとして、中学生にどの作品を提示するか、漱石のものも含めて吟味が求められるところであろう。『坊っちゃん』に付された課題は、「主人公と清の行動や人柄、考え方についてどう思うか、話し合ってみよう」である。人物像をとらえ、自分の考えを持つことを求める課題であるが、「坊っちゃん」と「清」に焦点を当てた課題である。また、本文の後に「作家と作品」と題された1ページのコラムがあり、漱石の生涯をたどっているが、『吾輩は猫である』を取り上げ、「日本の近代文学では珍しい知的なユーモア小説として読者からの好評を受け、発表当時から現在に至るまで広く読み継がれています」と評している。また、結末部で漱石を「日本の近代文学の確立者として、文学史上に大きな位置を占めています」と価値付けている。この価値付けが読書案内への2作品の掲載にも結びついている。

学校図書『中学校 国語2』は、教材名が「坊っちゃん（一・抄）」となっており、他社の教材と異なり、抄出であることが、冒頭に明示されている。また、作者名の下に、「小説の見方・読み方を学ぶ」という目標が記されている。この教科書の読書単元は2単元で、『坊っちゃん』は「読書1」に収められており、「読書2」は、岡本太郎「宇宙が叫ぶ－梵鐘・歓喜－」と井上靖「過去を超える回想の力－井上靖・歴史小説の世界－」のセッティングである。

「坊っちゃん(一・抄)」には、『坊っちゃん』の冒頭部に続き、「参考」として、夏目房之介の「孫が読む漱石－坊っちゃん」という文章が添えられている。房之介は、「まずいことに『坊っちゃん』好き、漱石好きを不快にさせそうなことばかり目につく」としながら、登場人物とあらすじをかいつまんで紹介した後で、次のように述べている。

「表面的には痛快かもしれないが、なにか、本当は暗い話のような気がするなあ。」

という印象を受けた。

ただキャラクターの造形はべらぼうにうまい。悪役といじめられ役、傍観者と正義漢をみごとにあだ名と共に、分  
かりやすく対比している。

坊っちゃんも山嵐も、所詮負ける側の人間で、官軍、維新政府に目の敵にされ、新時代に敗れてゆく旧旗本と  
会津藩の組み合わせとして置いてみた、ということだろう。

『坊っちゃん』の内包する暗さ、典型としての人物造形の妙、佐幕派の文学としての性格を端的に説明した解説となっ  
ている。これらは、これまでの『坊っちゃん』研究でも言及されてきたところであるが、中学生にどこまで問題として提  
起するかは論議のあるところだろう。

さらに「学びの窓（坊っちゃん・孫が読む漱石）」には、先の目標をふまえた「小説の見方・読み方を学ぼう」と  
いう問題提起の元に次の3つの課題が提示されている。

① 「坊っちゃん」を読んだ感想を書いてみよう。

② 夏目房之介が「坊っちゃん」をどのように捉えているか、次の観点から整理してみよう。

〈粗筋〉〈印象〉〈キャラクターの造形〉〈作者〉〈語りのスタイル〉

③ ②の観点を意識して、①の感想を書き直してみよう。また、その感想を読み合って、同じところや違うところを確  
かめてみよう。

『坊っちゃん』が小説入門的な位置付けにあることがうかがえる課題設定である。また、作品を神格化しない孫の  
文章が前にあることで、学習者は、より自由に漱石文学に接することができると思われる。

教材末尾に付された評価欄「ついた力を確かめよう」は、「小説」というジャンルを明示した上で、「言葉の力」と  
して、「名作と呼ばれる小説の新たな捉え方や見方を学んだ」、「考える力」は、「小説を読むことの意味について考  
えることができた」、さらに「知識や技能」として「近代作家の創作活動について知ることができた」という学習成果  
の達成が求めている。

教育出版『伝え合う言葉 中学国語2』も、読書単元が2単元で、『坊っちゃん』は2番め、第1単元「読書へ  
の招待①」の教材は、佐藤真海「夢を飛ぶ」、病気と障がい克服してパラリンピックに出場した走り幅跳び選手に  
よる教科書のための書き下ろし教材である。ここで設定されている目標は、「さまざまな方法で集めた情報の中から適  
切なものを選び、自分の考えをまとめる」で、情報の収集・処理・活用に関わる目標になっている。これに対して、第  
2単元の目標は、「わが国を代表する作家とその作品についてふれ、近代の小説や物語を読む」である。また、単  
元名も「読書への招待②〈近代文学へのいざない〉」となっている。最初の読書単元にはなかったサブタイトルをあえ  
て付け、「近代文学」の読書であることを強調した単元設定である。

『坊っちゃん』本文の後には、「作品解説『坊っちゃん』」が付されているが、この文章の冒頭の一文は、「『坊っちゃん』  
は発表以来、多くの人々に愛されてきた国民的な小説である」となっている。サブタイトルの付された単元名「読  
書への招待②〈近代文学へのいざない〉」、目標の「わが国を代表する作家とその作品」そして、この作品解説の「国  
民的な小説」という文言は、漱石文学を近代文学を代表するものと捉え、その入門として『坊っちゃん』が提示され  
ていることを示している。

作品解説では、さらに、「狸」、「赤シャツ」等の人物が「人間の典型的なタイプの一つに作り上げ」られているこ  
とを示し、「読んだ人がこれをおして世の中の見方を発見していくことのできる点に、小説のおもしろさがあるのだろう」  
という小説観を提示している。また、「『坊っちゃん』は主人公が自分のことを振り返り、回想する小説である」ことを示し、



このような「回想」小説の「今」をとらえることや、語り手と語りの問題の重要性が示唆されている。また1ページの作者紹介に続いて「英国留学から職業作家へ」というページがあり、漱石の人生と作品がイラスト、写真を交えて見開き2ページに示されている。これは、タイトルが示すとおり、漱石に於ける「東と西」の問題を一つの核にした、作家論的探究への誘いともなっている。

#### 4. 「資料」として収められた『坊っちゃん』

光村図書『国語1』の『坊っちゃん』は、巻末の「資料」に収められている。ここでは、「明治時代の文豪、夏目漱石が書いた『坊っちゃん』の冒頭である。夏休みや冬休みなどを使って続きを読んでみよう」という読むことへの誘いが記されている。長期休暇の読書のための「資料」であるが、ここで用いられている「文豪」という言葉は、前掲の「わが国を代表する作家」、あるいは「日本の近代文学の確立者」といった捉え方と共通する。

学習の手引き的なものは付されておらず、作者紹介も次のように簡潔である。

作者 夏目漱石 一八六七（慶応三）——一九一六（大正五） 東京都出身。小説家・英文学者  
著書 「吾輩は猫である」「三四郎」「こころ」など。

作者の経歴を細かく理解させることより、まず作品そのものと出会わせたいというスタンスの感じられる作品提示の在り方である。この教科書のみが一年生への掲載であることも含め、『坊っちゃん』や「夏目漱石」との出会い方が他と若干異なっていると言えよう。

#### 5. 「読むこと」の教材としての『坊っちゃん』

三省堂『現代の国語3』は、『坊っちゃん』を「読むこと」の教材に位置付けている。目標に掲げられているのは、次の2点である。

- ・語句の使われ方に注意して読み、表現の仕方について評価する。
- ・作品をきっかけとして、同じ作者の本や文章などを読み、考えを深める。

1点めは、読み方と作品評価に関わる目標であるが、小説の読み方を学ぶという性格のものではない。比較的一般的な事柄が扱われており、「語句の使われ方」や「表現の仕方」に含まれる事柄は多く、目標とするところがやや曖昧と言えなくもない。

2点めは、「きっかけ」という言葉があるように、読書への誘いとしての目標であり、「読むこと」の教材であると同時に読書をつよく意識した教材であると言える。ここからも今日の『坊っちゃん』の中学校教材としての位置付けがうかがえる。

本教材には、これらの目標を具体化し、学習活動を促すための「学びの道しるべ」が付されているが、ここでは、まず「内容を整理しよう」の項に次の2つの事柄が挙げられている。

- 1 登場人物の性格や人柄を表すことばを、文章中から探そう。
- 2 1で見つけたことばについて、「坊っちゃん」に当てはまるものと、それ以外のものとに分けよう。

この「学びの道しるべ」をみると、ここで目指されているのが、東京書籍他の教材と共通する典型としての人物造形の把握であることが読み取れる。典型的人物の創造が近代小説の一つの特色であるとする小説観がうかがえよう。

また、次の「考えを深めよう」には次の課題がある。

- 1 「坊っちゃん」の行動に対する評価について、「清」とその他の人たちとで異なっているのはなぜか、考えよう。
- 2 「坊っちゃん」と「清」が別れる場面から、感じたことや考えたことを交流しよう。

前述のように現行教科書に採られている『坊っちゃん』は、すべて冒頭部であり、そこでは、清の存在が大きい。清との関わりを重視した『坊っちゃん』観が反映されていると言えよう。まっすぐな性格の正義漢の松山での痛快な行動を楽しむという古典的な『坊っちゃん』の読み方とは異なる方向性が示されていると言えよう。読書教材としてであれ、

「読むこと」の教材としてであれ、中学校という時期における『坊っちゃん』との出会わせ方としての適否が問われるところではある。

さらにこの「学びの道しるべ」には「学びをひろげよう」の項があるが、そこには次の2つの課題の「どちらか」に「取り組みよう」という課題がある。

A この作品の続きや、同じ作者の「吾輩は猫である」「夢十夜」などを読み、気に入った場面を選んで、表現の特徴を生かして朗読しよう。

B 夏目漱石や森鷗外などの近代文学の作品を読んで、紹介し合おう。

ここからも、近代文学への誘いとしての『坊っちゃん』の位置付けが看取できるが、「朗読」への展開は、漱石文学への親しみ方として、他の教科書の教材と異なるところである。

また、この教材にもこの後に教育出版のものと同様、見開き2ページの漱石とその作品についての紹介がある。こちらは教育出版に比べて作品をまず前に出しており、1ページめは、「夏目漱石の世界」と題する作品紹介で、『三四郎』、『吾輩は猫である』、『こころ』、『夢十夜』がその対象である。また題目の下の説明には、「文明開化とともに、日本の近代化は駆け足で進み、時代は大きく変わっていきます。漱石はその変化を見つめ、作品の中で問い続けた作家でした」という文言がある。「日本の近代」と対峙した作家としての漱石像がここで語られている。2ページめは、上段が「漱石と子規－明治の青春時代を生きた二人」、下段が「漱石と鷗外－対照的な二人の文豪」である。近代文学、とりわけ明治文学の教材化に於いて、文学史的事項をどのように提示するかは、重要であり、近代文学研究と国語科教材の編成的研究の往還が求められるところである。

## 6. 「坊っちゃん」と「清」に焦点化することの功罪

近年、『坊っちゃん』の教科書掲載箇所は、冒頭部に固定されつつある。これについて、三浦和尚は、次のように述べる。

『坊っちゃん』については、冒頭（第一章）が、坊っちゃんの人物像と「清とのわかれ」という点でまとまりがよいことがいちばんである。以降の部分では、生徒が先生をからかう、先生どうしが反目するなど、あまり教室に持ち込みたくない話題であることも影響している。<sup>注5</sup>

教科書教材として採録するには、三浦の指摘するように、確かにこの冒頭部は「まとまりがよい」箇所である。また、他の部分には、授業で扱いにくい要素が含まれているのも三浦の言うとおりである。しかし、同時に、この部分からだけでは、『坊っちゃん』という作品の面白さが学習者に十分伝わらないことが懸念される。作品のストーリー展開の面白さや、典型としての人物造形の巧みさ、随所にちりばめられたユーモアは、冒頭部のみでは味わえない。読書教材として掲出しても、どれだけの中学生が続きを読みたいと感じるだろうか。

また、教材化された部分だけでは、松山での「坊っちゃん」の物語は授業の範囲外になりがちで、この作品が痛快な面白い小説であることは学習者に伝わりにくい。もちろん、すでに多くの研究者が清の存在の重要性を指摘している。谷口幸代の次の指摘なども、題名や人物の呼称に着目することの大切さを学ばせる上での参考にもなる。

では仕掛けられた逆転を見ていくと、まず題名にもなっている〈坊っちゃん〉にしても当初は清が愛情と敬意をこめて主家の男子を呼ぶ呼称であったはずだが、赤シャツと野だいこの会話では「あのべらんめえと来たら、勇み肌の坊っちゃん」だというように世間知らずな男を軽んじていう呼称に転じている。つまり尊称から蔑称へとすべり落ちていく。<sup>注6</sup>

谷口の指摘にあるとおり、「坊っちゃん」をめぐる登場人物の相関関係をとらえ、物語の展開を味わうためには、「坊っちゃん」と呼ぶ清という人物及び坊っちゃんとの関係を捉えることが不可欠であるが、松山の物語を読み進める中でそれはより鮮明になるのであり、作品の面白さを捉えさせるためには、冒頭の別離の先も読ませたいところである。

また、「なんだか（何だか）たいへん（大変）小さく見えた」という教科書採録部分の結びは、丁寧に読むと清の

寂しさ・悲しさが胸を打つ場面であるが、初読の中学生に対する指導で、ここを強調することが、若い世代を『坊っちゃん』と出会わせる上で望ましいかは疑問の残るところである。例えば『吾輩は猫である』の読みにおいても、多くの研究者が、作品の底に流れる寂しさや悲しみを指摘しているが、これとて、猫の目を通して語られ風刺される人間世界を面白く読んだ上で、このようなより深い読みに至り、作品及び作者の世界観に迫っていくというのが、順当な道筋ではなかろうか。このように考えると、例えば三省堂の前掲「学びの道しるべ」の「『坊っちゃん』と『清』が別れる場面から、感じたことや考えたことを交流しよう。」は、重要な問いではあるが、これを重く扱いすぎることにも問題があるように思われる。

ただし、このような見方と異なる見解を示す言説もある。松元季久代は、「『清に見送られた新任教師の物語』という枠組みで切り取られた教科書の『坊っちゃん』は、そのテキストの空所に「その後の坊っちゃんの物語」として、民衆の想像力が期待する明るく痛快な青年教師の活躍物語を派生させたのではないだろうか」と指摘する。そして、「『教科書の中の『坊っちゃん』』は、敗者の貴種流離譚を排除する力によって、その跡地に、勸善懲悪型の学園美談を散種させたと見る事もできよう」と述べる。<sup>注7</sup>

ただ、昨今の中学生たちの読書傾向と読書量を考えると、以前のように冒頭部を教科書で読んだことをきっかけに、全編を読む生徒は決して多くはないのではないと思われる。教科書で『坊っちゃん』を学んだ生徒たちが、「勸善懲悪型の学園美談を散種させた」時代とは状況が異なってきたように思われるのである。それだけに、論者には、現代の中学生たちにとってより魅力的であると思われる箇所を切り取って教材化すること、そのための教材の編成的研究が、『坊っちゃん』の教材化と指導における重要な課題の一つであると感じられてならない。

いずれにせよ、授業者は、これからの時代を生きることになる中学生たちにどのような「坊っちゃんの物語」を紡がせるべきかを考え、これまでの『坊っちゃん』に関わる言説や授業実践に学びながら、指導にあたる必要があろう。また、教科書編集の側に於いては、固定化しつつある掲載箇所について、今後も検討していくことが求められよう。また、教材本文に付す文章や学習の手引き、作者紹介、目標設定等についても同様である。

それは、すなわち、教える側や教材を提供する側にある私たちが、中学生たちを『坊っちゃん』あるいは漱石文学とどう出会わせるか、そこから何をこそ学ばせるかについて今日的な観点から吟味することである。それは、また、近代の言語文化を次の世代にいかにかつぎつぐか、また、「近代」が投げかけた「光と影」を歴史的課題としてどう伝えるかという問題につながっている。

## 7.『吾輩は猫である』の冒頭部とのセッティング

中学校国語教科書への漱石文学の掲載は、学習の手引き等で他の作品が引かれることはあっても、近年の教科書に於いては、基本的に一作品であった。

これに対し、『坊っちゃん』と『吾輩は猫である』を対等な形で併載し、学習者に、近代小説の読み方を学ばせる学習材として提示することも今後の漱石文学の教材化として意義深いことではないと思われる。

『坊っちゃん』と『吾輩は猫である』は、語りに大きな魅力があり、近代小説に於ける語りの意味や機能、語り手と作者、読者の関係について、中学生に考えさせ、小説の読み方を学ばせる上で有効かつ魅力的な作品である。

学習者の多くは、語り手=作者といった読み方をしており、とりわけ一人称の語り手を作者その人と捉える傾向が強い。そのような学習者に『吾輩は猫である』を提示することで、学習者は猫が小説を書くはずはないことに気づき、作者=語り手であるという考え方を覆される。さらに、猫が尊大に「吾輩は」と語り出すおもしろさ、なおかつその吾輩には名前すらないという矛盾、猫の目を借りることによって読者の前に立ち現れてくる人間世界の深層や滑稽さ、そこから起こる笑い等を味わわせることで、小説の面白さにふれさせることができる。ここで『坊っちゃん』の冒頭を併せ読ませることで、一本気な正義漢である坊っちゃんが、周囲を顧みることもなく突っ走る面白さに気づかせることが可能になる。「坊っちゃん」と「清」の関係性を読み取らせる学習指導では気づかせることが難しいユーモアや語りの魅力、作



品のテンポを味わわせることができると考えられる。同時に、『吾輩は猫である』と併せ読ませることで、語り手の語りによって描き出される世界があくまで語り手の目に写った世界であることを認識させることも可能になる。「坊っちゃん」を「信頼できない語り手」と捉える視点を持たせることもできよう。

2作品の後の学習の手引きに、「他の漱石作品の書き出しを調べ、ノートに書き抜いてみよう」といった課題を付けると小説の書き出しに着目する目を育てることもできるし、漱石文学への誘いともなる。あるいは、『草枕』、『夢十夜』等の冒頭部をコラム的なページに付けるのも一案ではないだろうか。

またさらに、漱石に於けるこのような語り手の発見は、言文一致体の確立への道程としても重要で、口語文体の確立と近代文学の関係について学ばせる上での格好の教材となる。

この点について安藤宏は、「近代以降の小説は、西洋の十九世紀的なリアリズムを取り込もうとする動きの中で、「人称」という発想に出会い、これを日本語の言文一致体に変現していかうとする悪戦苦闘の歴史でもあった。物語の内容を表現するにあたって、誰が、どのような「資格」で語るのか、という問題が、おそらくこれほどまでに厳しく問われた時代はほかにはなかったのである」とし、『坊っちゃん』を例に次のように述べる。

たとえば、夏目漱石の『坊っちゃん』（「ホトギス」明 39.4）の主人公は、自分のいない場面で赤シャツたちがどのような密議を凝らしていたのかを知ることはず、語り手として与えられた「資格」を勝手に踏み越えることは許されないのである。むろん、こうしたことがすべて矛盾なく実行できるかどうかはさて置き、少なくともそれを前提として了解していこうとする合意形成のプロセスが、「人称」という概念が一般化していく過程であったのだともいえよう。

中略－

近代小説は人称的な「資格」を通して常に「何を語れぬのか」が問題とされ、かざられた情報をもとに独自のバイアス—魅力ある空白や矛盾—を生み出してきた歴史でもあった。<sup>注8</sup>

安藤は、同書の中で『吾輩は猫である』についても言及し、「読者の求めに応じて『吾輩は猫である』が長編化していくプロセスは、言文一致体において実況中継の視点と統括的な語りの視点をどのように折衷させていくかという、試行錯誤の実践にもなっていたわけである」とも述べる。<sup>注9</sup>

ここに示されているような視座に立って、『坊っちゃん』と『吾輩は猫である』を同時に読ませ、これらを他の同時代の小説と比較させ、考えさせることで、漱石の作品が、口語文体の確立の上で大きな役割を果たしたことに気づかせることができよう。近代小説と言文一致体の成立について学ばせ、「文体」を意識させる上でも、『坊っちゃん』と『吾輩は猫である』を併せ読ませることは有効であろう。それは「伝統的な言語文化」の指導とも言えるのではないか。「伝統的な言語文化」というと、近世以前の作品が指導対象となることがほとんどだが、明治の文学にもこのような視点から光をあて、「日本語」の問題について考えさせていくことは重要ではなかろうか。「古典」という言葉を漱石や鷗外の作品にあてはめてもよい時期が来ているようにも思われる。

## 8 古典としての明治文学

前掲書において教科書教材としての『坊っちゃん』について論じた三浦和尚は、その項の結びで次のような発言をしている。

もし今後、漱石作品（加えて鷗外作品）が中学校の学習材として姿を消すとしたら、「近代」は、太宰治の『走れメロス』をどうみるかにもよるが、芥川龍之介の『トロッコ』に代表されることになってしまう。少なくとも、「明治」は散文としては消える。明治の言語文化は、子規、晶子、啄木などの韻文に委ねられることになる。それがことばの学習としてよいのかどうか。確かにことばが難しいのは事実であるが、だからなくてもよいというふう考えるのは短絡にすぎる。

『坊っちゃん』『吾輩は猫である』が、高校で『舞姫』の口語訳が必要なと同じような状況にあることは想

像に難くないが、少なくとも良質の文学である。教科書にあるか否かを問わず、どのようにして学習者と出合わせ  
るかは、考えたいところである。<sup>注10</sup>

「明治」の散文を教材としていかに扱うかの問題提起がなされているが、前節でふれたように「伝統的な言語文化」  
あるいは、「古典」として扱い、教材化の在り方や学習指導を構想する必要があるのではなかろうか。

現代文学のいくつかは、平易で学習者にとって抵抗のないものが選ばれて掲載されることは、今後も続くであろう。  
しかし、そのような流れの中で、明治の小説を教科書から消すことは、かけがえのない「言語文化」、今に続く「古典」  
との出会いの機会を奪うことになる。このような視座からも、漱石文学の教材化とその指導の在り方について、鷗外文  
学とも併せて、検討していく必要があるのではなかろうか。

#### 注

注1 『月刊国語教育 通巻 128 号 特集 鷗外・漱石が危ない』 東京法令出版 1992.5 PP27

注2 前掲誌 PP28 ～ 30

注3 表記等の異同と各教科書本文の出典についての検討は、今後の課題としたい。

注4 この点について、以下の先行研究を参照した。・『中学校国語教科書内容索引－昭和 24 ～ 61 年度－ 上  
巻』国立教育研究書附属教育図書館 財団法人教科書研究センター 共編 教科書教育センター 1986.3  
PP329 ～ PP340 ・五十嵐伸「データバンク 中学校国語教科書における鷗外・漱石作品（戦後）」・前掲  
『月刊国語教育 通巻 128 号 特集 鷗外・漱石が危ない』東京法令出版 1992.5 PP51 ～ 55 ・橋  
本暢夫「夏目漱石作品の教材化とその史的役割」・『中等学校国語科教材史研究』橋本暢夫 溪谷水社  
2002.7 PP261 ～ 331

注5 三浦和尚『国語教育 実践の基底』三省堂 2016.12 PP70

注6 谷口幸代「漱石の『坊っちゃん』と『坊っちゃん』の漱石」・田中実／須貝千里『文学の力×教材の力 1』  
教育出版 2001.3 PP130

注7 松元季久代「『教科書のなかの『坊っちゃん』—熱血教師像はどこから生まれたか』・『『坊っちゃん』事典』  
今西幹一企画 佐藤裕子・増田裕美子・増満圭子・山口直孝編 勉生出版 2014.10 PP251

注8 安藤宏『近代小説の表現機構』岩波書店 2012.3 PP22

注9 前掲書 PP53 ～ PP54

注10 前掲書 PP77 ～ PP78

#### 参考文献

- ・『夏目漱石』一～三 小宮豊隆 岩波書店 1953.8 ～ 10
- ・『夏目漱石』森田草平 筑摩書房 1967.8
- ・『夏目漱石の作品』片岡良一 鷺の宮書店 1967.12
- ・『シンポジウム日本文学 14 夏目漱石』佐藤泰正・越智治雄・平岡敏夫・高本文雄・相原和邦 学生社 1975.11
- ・『漱石序説』平岡敏夫 塙書房 1976.10
- ・『国語教育実践講座 第七巻＜理解＞散文の指導』石井庄司・飛田隆・山口正 教育出版センター 1986.4
- ・『漱石作品論集成第二巻 坊っちゃん・草枕』片岡豊・小森陽一編 桜楓社 1990.12
- ・『漱石作品論集成第一巻 吾輩は猫である』浅野洋・太田登編 桜楓社 1991.3
- ・『夏目漱石を江戸から読む』古谷野敦 中公新書 1995.3
- ・『漱石 ある佐幕派子女の物語』平岡敏夫 おうふう 2000.1
- ・『日本語学 通巻第 281 号 特集 漱石・鷗外を学校で読む』明治書院 2004.7
- ・『漱石はどう読まれてきたか』石原千秋 新潮社 2010.5



- ・『夏目漱石『猫』から『明暗』まで』 平岡敏夫 鳥影社 2017.4
- ・『漱石激読』 石原千秋・小森陽一 河出書房新社 2017.4
- ・『夏目漱石『坊っちゃん』をどう読むか』 石原千秋責任編集 河出書房新社 2017.5